



急がないという決断



一般社団法人 茶道裏千家淡交会理事
株式会社淡交社 代表取締役社長

伊住 宗陽

近年、「タイムパフォーマンス」という言葉をよく耳にするようになりました。仕事でも日常でも、私たちは常に効率を求められています。メールは即返信、会議は短時間、意思決定は迅速に。生成AIの普及によって、その流れはさらに加速しているように感じます。もちろん、スピードは大切です。しかし、本当に重要な判断まで急いでしまっていないでしょうか。

茶道では、炭をつぎ、湯を沸かし、その湯で一碗のお茶を点てます。効率だけを考えれば、もっとと簡略化することもできるでしょう。しかし茶の湯は、あえてその時間を大切にします。

——炭を整える時間。湯の音に耳を澄ます時間。客を待つ時間。



それらは単なる準備ではありません。人を迎えるために自分を整え、場を整える時間です。

茶道には「刻限」という考えがあります。早すぎても遅すぎてもいけない。その場にふさわしい時を見極める感覚が求められます。経営においても同じではないでしょうか。

か。採用、人事、投資、新規事業。どれも結論を急ぐことはできません。しかし、本当に難しいのは「いつ決めるか」です。早い判断が良い判断とは限りません。一方で、考えすぎれば機会を逃します。大切なのは、急ぐことでも遅らせることなく、その状況にふさわしいタイミングを見極めることです。

茶道が教えてくれるのは、判断を遅らせることではありません。急がないという選択肢を持つことです。情報もスピードも十分にある時代だからこそ、私たちは「待つ力」を失いつつあるのかもしれない。

——炭が熾り、湯が沸くのを待つ。

その時間の中で育まれる感覚は、経営においてもまた、大切なものではないでしょうか。